

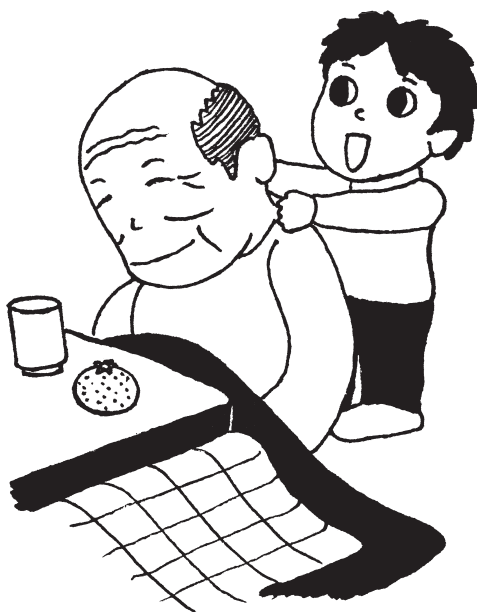
Ⅲ 小学校 高学年

生 命 を ^{いと}愛 お し む

この地球上に
あたりまえのようにあるもの。
空気、大地、水、光。
明日の朝、またのぼる太陽のように
あたりまえの^{そんざい}存在。
空や、海や、草花や、動物、そしてわたし。

でも、それはきっと
^{き せき}奇跡に近い、あたりまえのこと。

(出典：文部科学省「心のノート」 小学校5・6年 p.56、p.57)



５ 「いのち」の重さ

昭和二十年（一九四五年）八月九日。この日も朝から暑く、ぬけるような青空でした。戦争中で生活はきびしかったのですが、苦しいながらも、ともに助け合い、いたわりあい、今と変わらないキラキラした笑顔の家族の姿が、長崎にはありました。

午前十時三十分ごろ、空しゅう警報が鳴りました。

「お母さんたちもすぐ行くから先に防空ごうに行つとかんね。」

この母の言葉で私と妹は、母や姉よりも先に、家から少しはなれた防空ごうに向かいました。それが最後まで知らずに…。

しばらくすると「空しゅう警報、かいじよ。敵の飛行機は来ません。」という声が聞こえました。防空ごうの中にいた大人も子どもも「よかったあ。」と笑顔で外へ出て行きました。でも、私と妹はそのまま防空ごうの中に残って遊んでいました。

そのときです。

ピカッ！ ドーン！ バーン！

すさまじい光と音と風。わたしも妹もそのあと気を失いました。

午前十一時二分、長崎に原子爆弾が落とされたのです。この一発の原子爆弾で、何のつみもない七万人をこえる人の命が一しゆんにしてうばわれたのです。

目がさめました。生きていました。妹も。だれもいなかった防空ごうの中には、体中にひどいきずを負った人がおおぜい集まっていました。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

私は妹と二人で、母と姉をさがすため、防空ごうを出ました。すると辺り一面焼け野原。真っ黒で血だらけの人たち。いたるところに死体がたくさん重なっています。家の近くにもたくさんの死体。大人、子ども、そして赤ちゃんも。信じられない光景が広がっていました。私と妹はこの世の地獄を見たのです。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

私は幼い妹の手を引きながら、母と姉を必死でさがしまわりました。母と姉が心配で心配で…。二人で泣きながらあちこちさがしまわりました。

「お母ちゃん！ お姉ちゃん！」

でも、私たちの願いもむなしく、姉は家の近くで、そして母も近所のおばちゃんの家で死んでいました。そのときのことは今でもわすれられません。

いつもと変わらない朝をむかえたはずなのに、幸せだった家族は、私と妹の二人だけになってしまいました。あの日の母と姉の最後の笑顔が今でもわすれられません。

「お母ちゃんもお姉ちゃんも死んでしまったねえ。」

「お母ちゃんに会いたかねえ。」

「お母ちゃんやお姉ちゃんといっしょに死んでしまえばよかったねえ。」

くる日もくる日も悲しくて悲しくて、私も妹も生きる気力さえ失いかけてました。私たちのまわり、いや、長崎中に、私たちと同じように家族を亡くした人がたくさんいました。それでも、みんな齒をくいしばって一生けんめい生きたのです。



しばらくすると、焼け野原だった長崎のあちこちから小屋を建てる音がひびき出しました。その音はしだいにふえ、大きな家も建つようにもなりました。長崎は少しずつ少しずつもとの長崎のようになり、やがてさらに大きく大きく発展していきました。

あれから六十年…。私は、母親になり、そして孫もできました。今、母や姉の知らない新しいのちに囲まれ、幸せに暮らしています。母や姉がなくなつた場所には大きなプールができました。八月には、私の孫もふくめて子どもたちの楽しそうな声がプール中にひびき、キラキラかがやいた親と子の笑顔があります。

プールで元気に遊ぶ孫や子どもたち、笑顔いっぱいの家族の姿を見つめながら、私はいのちのおもさ、いのちのとうとさ、いのちのありがたさをかみしめて、こう思います。

「お母ちゃんもお姉ちゃんももつともつと私たちと生きたかったはずよねえ。お母ちゃん、お姉ちゃんだけでなく、おとなも子どもも赤ちゃんもみんなそうだったはずよねえ。みんなの分もがんばって生きんばねえ。」



1 資料名 「いのち」の重さ

2 資料について

高学年の段階においては、生命の誕生から死に至るまでの過程を理解することができるようになると思われる。こうした時期にこそ、児童にとってより実感・共感できる資料などに触れさせながら「いのちのおもさ」「いのちのとうとさ」「いのちのつながり」について考え、学ばせたいものである。また、この段階では、生命を尊重する心とともに力強く生き抜こうとする心や生命に対する畏敬の念を育みたい。

本資料は、実際に被爆を体験された方の話をもとにしている。今からおよそ60年前、戦時中でありながらも今の私たちと同じ長崎の風景に囲まれ幸せに暮らす家族の姿があった。ところが、8月9日に投下された原子爆弾によって、家族を失ってしまう。妹と主人公の大きな悲しみは決して癒えることはないものの、その中にもしだいに生きる意志を見出していく。主人公は、現在、子や孫という「新しいいのち」に囲まれて生活している。もし、生きることを断念していたら存在し得なかった「新しいいのち」であり、この「新しいいのち」は今を生きる私たち教師や児童たちとも重なる。本資料の主人公の生き方との出会いは児童に生きることそのものの価値を感じ取らせることができるものと考えられる。

生命を尊重する心を育んでいく場合においても、児童が生活する地域に起きた出来事、その地域だからこそできる素材を教材化していくことは、とても重要な要素である。原爆被爆で家族を亡くした人々の思いや極限状況の中にありながらもたくましく生き抜いてこられた長崎の人々の「生き方」との出会いは、自他の生命を尊重し力強く生き抜こうとする心や生命に対する畏敬の念を育むための「長崎だからできる」貴重な学習の場であると考えられる。

3 留意点

本資料は、実際に被爆を体験された方の実体験をもとにしている。授業前に、まず教師自身が実体験をされた方の思いに直接触れた上で、本資料を活用されることが望ましいと考える。

また、本資料は、「当時の生活の様子、家族の幸せな生活」「原爆後の様子、家族を亡くしたときの様子」「家族を亡くしながらも生きようとする決意」「現在の様子、子や孫に囲まれ『いのちのおもさ』『いのちのとうとさ』『いのちのありがたさ』をかみしめながら生活する様子」の4つで構成している。

4 事前指導の工夫

長崎市内の学校であれば、「原爆資料館等の見学」などで原爆被爆の状況や家族を亡くした人たちが長崎にたくさんいたことなどについて学習しておく。

「原爆資料館等の見学」ができない場合は、家族の自分に対する思いに触れる取り組み（家族からの手紙など）を行い、児童一人一人が自分の家族への思いを深めた後に、本資料を用いることで資料への共感を高めるようにする。

5 ねらい

家族を亡くすという極限状況に置かれながらも、そこからたくましく生き抜いてこられた生き方に出会うことによって、「いのちのおもさ」「いのちのとうとさ」「いのちのありがたさ」について考え、「生きることそのものに価値がある」という自覚を図る。

6 展 開

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 原子爆弾や原爆被爆について学習したことをふり返る。 ○原子爆弾や原爆被爆の学習でどんなことが印象に残っていますか。	1 原爆資料館などの見学をふり返ることを通して、資料への方向づけを図る。 家族をテーマにした学習の中で本資料を取り上げる場合は、前時までの活動を簡単にふり返るようにする。 ・一発の原子爆弾で、一瞬のうちに約七万人が亡くなったこと ・大やけどをおった人の写真 ・熱線で溶けたガラスや瓶
展 開	2 資料「『いのち』の重さ」を読んで考える。 ○お母ちゃんやお姉ちゃんが亡くなったとき、「私」はどんな気持ちだったのでしょうか。 ○「私」は、長崎の様子を見つめながら、どんなことを考えたのでしょうか。 今、「私」がかみしめている「いのちのおもさ」「いのち	2 教師の範読等によって「私」の場面ごとの様子を十分に捉えさせたい。 また、印象に残った点を中心に学級全体で話し合っていくことを投げかける。 お母ちゃんやお姉ちゃんが亡くなったときの思いを考えることによって、家族を亡くした悲しさや生きることがむなしく感じるなどの思いを共有させたい。 ・悲しい ・これからどうしようか ・私も死にたい、生きていけない 長崎に主人公と同じ状況の方が多くいたこと、長崎の復興の様子、お母ちゃんやお姉ちゃんの思いを確認しながら主人公の思いに共感させたい。 ・みんなもがんばっているから ・お母ちゃんやお姉ちゃんの分まで生きよう 「いのちのおもさ」「いのちのとうとさ」「いのちのありがたさ」について、

6 お り づ る

私のおじいちゃんは、私とお姉ちゃんをととてもとてもかわいがってくれました。私たちもおじいちゃんが大好きでした。

そんなおじいちゃんの病気がとても重い病気であることが分かったのは去年の九月のことでした。それまで入院と退院をくり返していたおじいちゃんは、これからは家で病気とたたかうことに決めたのです。

「大好きなおじいちゃんのために、せいっぱいのことをしてあげよう！」

私たち家族はそう話し合いました。そして、私とお姉ちゃんが考えたのは、千羽鶴をおることでした。千羽鶴ができたらおじいちゃんはきつとよくなるのです。

「おじいちゃん、早く元気になればいいね。」

「きつと喜ぶよね。」

お姉ちゃんと私は声をかけ合いながら、毎日毎日、鶴をおり続けました。

おりづるの束は、一束一束増えていくのに、おじいちゃんの病気は、だんだん悪くなっていきました。五月になると、とうとうおじいちゃんは、食べることもできなくなり、はげしいいたみでねむることさえできなくなっていました。

私は、大好きなおじいちゃんに少しでも元気でいてほしかったから、学校から帰るとまず先におじいちゃんの顔を見に行きました。顔を見ると安心しました。少しでもゆつくり休んでもらおうと、家の中では大きな音をたてないようにしました。

ある日の夕方、お母さんが私とお姉ちゃんをよぶ声がしました。そこには、いつもとちがうきびしい顔をしたお父さんとお母さんが座っていました。私とお姉ちゃんは正座をしてお父さんの話を聞きました。お父さんは苦しそうに話しました。

「おじいちゃんの命はもう長くない。もうすぐこの世を旅立つんだよ…。」

次の日から、私とおねえちゃんは、さらに気持ちを込めて鶴をおり続けました。千羽鶴ができあがるまでもう少し…もう少しです。作る手に力が入ります。

(がんばって！おじいちゃん。千羽鶴がおじいちゃんをきつと救ってくれる。)



でも…。千羽鶴は間に合いませんでした。六月二十六日の夜、おじいちゃんの息が急に苦しそうになりました。私は、心ぞうがドキドキしました。

(死なないで！おじいちゃん！)

私たち家族は、声をかけたり体や手足をさすったりしました。でも、おじいちゃんの息は、だんだん弱くなっていきました。そして、とうとう息が止まりました。

「お亡くなりになりました。」

お医者さんの声が静かに部屋にひびきます。お母さんが泣きくずれました。お父さんのなみだを初めて見ました。私もおねえちゃんも悲しくて悲しくて、おじいちゃんにすがってなみだをボロボロ流して泣きました。こんなに悲しいなみだを流したのは生まれて初めてでした。こんなにたくさん泣いたのも生まれて初めてでした。

次の日は、お通^つ夜^やでした。おじいちゃんの思い出がよみがえります。私とお姉ちゃんは、お通夜の間に、ずっと泣きながら間に合わなかった鶴をおり続けました。

「もう十分よ。おじいちゃんもきつとそう思っているわよ。ありがとう。」

なみだを流しながらお母さんが言ってくれました。

そして今日はお葬^{おうちしき}式^{しき}。千羽には少し足りないおりづるをおじいちゃんの棺^{ひつぎ}に入れました。最後のお別れをすませてから火葬にしました。ボロボロのほねだけになってしまったおじいちゃん、なみだが止まりませんでした。もう二度とおじいちゃんの元気な姿を見ることはできない、おじいちゃんはもう生き返ることはないんだ、ということがはつきりと分かりました。

いつしよに入れた千羽鶴はおじいちゃんといつしよになくなってしまいました。私とお姉ちゃんのかたに手をかけて、お父さんが言ってくれました。

「千羽鶴は、よう子とお姉ちゃんのやさしい気持ちといつしよに、おじいちゃんのところへ羽ばたいて行つたんだよ。ありがとう。」

私とお姉ちゃんは空を見上げました。おじいちゃん的笑顔が見えたようでした。



1 資料名 「おりづる」

2 資料について

児童は、日常の生活の中で植物や動物の死を経験したり、テレビ等を通して間接的に人間の死を見聞きしたりしている。しかし、実際には家族や身近な人の死に直面する機会は少ないと思われる。そこで、この期に実際におじいちゃんの死に直面した主人公の経験を通して、家族の一員としての関わり方や家族の心情等にふれさせ、共感することにより、命のはかなさや命は自分だけのものではないということをとらえさせることは意義深いと考える。

本資料は、主人公（よう子）のおじいちゃんに対する思いやり、努力をしても病気が改善しない苦しみ、避けようのない死に直面する悲しみ、死んでしまったおじいちゃんへの思い等、児童が日常の生活の中で経験することが少ないと思われる家族の死について、できるだけ具体的な内容・場面で構成した。

指導にあたっては、場面ごとの主人公の心情に焦点をあてていく。特に病気のおじいちゃんへの思いと避けようのない死への苦悩、おじいちゃんの死に直面した悲しみへの共感を深めさせたい。また、ふり返りの場面においては、これまでに本やテレビ等で見聞きした人の死について心に残っていることを想起させる。このことにより本時の学習で育む心情の自覚化をより確かなものにできると考える。

3 留意点

本資料は「死」を直接的にとらえた資料である。指導にあたっては、これまでの生命等に関わる学習の経験や学級の実態に応じて、不用意に「死」に対する恐怖心等をあおらないような配慮が必要である。終末の説話については、ゲストティーチャーに校長や保護者、医師、看護師等の経験豊かな方にお話していただくことで、児童の心情がより深まることが期待できる。

4 事前指導の工夫

これまでに各自が経験した自分や身近な人のけが・病気・死にかかわることを事前に把握し、本時の学習へ向けて意識をもたせておく。

5 ねらい

おじいちゃんの病状が悪化したときの「元気になってほしい」と願うよう子の気持ちやおじいちゃんの死に直面したときの悲しさに共感することを通して、命が自分だけのものではないことや命の有限性を感じ取り、自他の命を尊重する心情を深める。

6 展開例

過程	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	1 「家族や親戚など、身近な人が死んだときの悲しみを感じたことがありますか」のグラフを見て話し合う。 ○ グラフを見て、どう思いましたか。	1 「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」の集計結果「(2) 身近な人が死んだときの悲しみ」のグラフを提示し、自分の考えや感想を出し合い話し合わせる。 ・ 6年生は2割以上の人が悲しみを感じたことがないと答えている ・ 家族や身近な人の死に直面する機会が少ないのかな
展 開	2 資料「おりづる」を読んで考える。 ○ どんな思いでよう子は千羽鶴をおり始めたのでしょうか。 ○ もうすぐ死んでしまうことを聞いたよう子はどんな思いをしたのでしょうか。 どんな思いでお通夜の間じゅう鶴をおり続けたのでしょうか。	2 時間の経過とともに悪化するおじいちゃんの容態とよう子の気持ちに着目させながら資料を読む。 よう子が家族の一員として、何とかおじいちゃんに元気になって欲しいという思いから自分にできることを考えた心情をとらえさせる。 ・ おじいちゃんが早く元気になってくれるように鶴を折ろう ・ おじいちゃんががんばってるから私もがんばって鶴を折ろう 避けようのないおじいちゃんの死を知らされたよう子の心情をとらえさせる。 ・ おじいちゃんが死んでしまうなんて信じられない。千羽鶴を完成させて、どうしてもおじいちゃんに元気になってもらいたい ・ がんばって鶴を折っているのに、どうしてもおじいちゃんは元気にならないの おじいちゃんの死に直面したよう子の心情に目を向けて十分に話したい。さらに間に合わなかった鶴をおり続けようとするよう子の心情に共感を深めたい。 ・ おじいちゃんに千羽鶴をあげると決めていたから ・ 鶴を折って千羽鶴をあげることがおじいちゃんにしてあげられる唯一のことだから

展	○「千羽鶴はおじいちゃんのところへ羽ばたいて行ったんだよ」というお父さんの言葉を聞いて、よう子はどんなことを思ったでしょうか。	おじいちゃんを大切に思うよう子の気持ちはおじいちゃんも充分に分かっていたと感じ取らせたい。 ・おじいちゃん喜んでくれてるかな ・おじいちゃんのためにがんばってよかったな
開	3 これまでの自分をふり返る。 ○今までに、身近な人が亡くなったり、話で聞いたりした経験がありますか。その時、どんなことを思いましたか。	3 人の死に直面した経験はまだ少ないと考えられる。人の死に出会った経験も含め、テレビや本などで出会った深く印象に残る人の死やその時の思いをふり返り共有することで、本時のねらいに基づいた価値の自覚化をより確かなものにしたい。その際、残虐な事件等の話題にならないように、教師が例示したり方向づけをしたりする必要がある。 ・自分のおばあちゃんが亡くなったとき悲しかった。 ・生き返ってほしいと思った ・自分もいつかは死ぬのかなと思い、命を大切にして、一生懸命生きていきたいと思った
終 末	4 教師（ゲストティーチャー）の話を聞く。	4 教師やゲストティーチャーが経験した人の死についての話をする。 大切な家族を亡くすという悲しい経験をもとに、より自他の命を大切にしていこうという心情を深めたり、命のつながりについて考えを深めたりするような話を行うことが有効である。

7 評価

- ・主人公（よう子）の心情への共感を通して、生ある者は、やがて死するという命のはかなさを受け止め、命の尊さと死という事実を感じ取ることができたか。
- ・身近な人の死について自分の考えを深めることにより、命を尊重しようとする心を育むことができたか。

8 事後指導の工夫

朝の読書の時間に「心のノート」p.64 を読んだり、保護者と連携を図り、家庭での話題に取り上げてもらい p.65 の「ふり返ってみようあのころ」を記入することで、さらに命を大切にしようとする心情が深まると考える。

9 参考

本資料は、県内の児童が実際に経験したことである。原文は、児童の母親がわが子の様子を担任あてに書いた文である。